

Title	心の世界を物語に学ぶ(カウンセリングシンポジウム)
Author(s)	兼松, 誠
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.2, 2013.1 : 21-22
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4342
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

カウンセリングシンポジウム 心の世界を物語に学ぶ

2012年9月28日

聖学院大学ヴェリタス館教授会室

2012年度 カウンセリングシンポジウム

聖学院大学大学院教授・聖学院大学こども心理
学科教授 平山正実氏

聖学院大学大学院教授・聖学院大学こども心理
学科長 窪寺俊之氏

聖学院大学大学院准教授・聖学院大学こども心
理学科准教授 藤掛明氏

聖学院大学大学院非常勤講師・牧会臨床スー
パーヴァイザー 堀肇氏(司会)

2012年9月28日、聖学院大学総合研究所カウ
ンセリング研究センターの主催でシンポジウム「心
の世界を物語に学ぶ」が開催された。今回のシン
ポジウムは、2011年7月に開催された「いかに心
の世界を学ぶか」の第二弾である。シンポジウム
の表題にある通り、今回、心の世界を学ぶ素材と
して選ばれたのは、古典から現代作品、伝承から
創作作品、そしてコミック作品である。講演者は、
本学大学院教授・こども心理学科教授平山正実氏、
本学大学院教授・こども心理学科長窪寺俊之氏、
本学大学院准教授・こども心理学科准教授藤掛明
氏であり、司会は本学大学院非常勤講師・牧会臨
床スーパーヴァイザー堀肇氏である。以下は、三
名の講演の報告である。

1. 重い病や死とどう向き合うか—とくに 価値と死との関係について

聖学院大学大学院教授 平山正実氏

平山正実氏が取り上げた作品は、トルストイの
『イワン・イリッチの死』と黒沢明監督の映画「生
きる」である。人間は、この世で生きていく以上、
何らかの「心の拠り所」を必要としているが、平
山氏はこの「心の拠り所」は、各人がその人生に
おいて、一生かけて形作ってきた価値観であると
考える。そして、さらにその価値は現実的価値と
超越的価値に分けられると言う。現実的価値とは

快価値や生命価値、利用価値、道具的価値、役割
的価値のことであるが、このような価値は病や死
によって意味を喪失してしまうのに対し、超越的
価値に属する精神的価値や聖価値あるいは人格的
価値は、死や病という現実を超越する。死が近づ
き QOL (生命の質) が低下し QOD (死に方の質)
が問われ始めた時、人は実際の生活場面において、
現実的価値と超越的価値とどう向き合うのかを描
いたものとして、平山氏が注目したのが上記の二
作品である。前者においては、不治の病に罹患し
た判事が、自分の死に直面してはじめて正義や愛
の感覚を取り戻していく。後者においては、市役
所の官吏が、胃癌に罹患し、死が避けられないも
のとなったことによって、最初は見向きもしなか
った公園建設のために奔走する。子供たちのため
の公園建設の決意には、創造と再生という聖なる
価値への希求、憧れ、願望が隠されていると、平
山氏は指摘する。両作品とも、病や死を媒介にし
て、超越的価値館や新しい価値の創造へと人が転
換していく姿を描いたものとして解釈されるので
ある。



平山正実教授

2. 「竹取物語にみるスピリチュアルな世界」—日本人の精神的基層を探る—

聖学院大学大学院教授 窪寺俊之氏

窪寺俊之氏が取り上げたのは、竹取物語である。窪寺氏は、小説、演劇、絵画などで様々に表現されてきたこの物語に魂の問題、つまり、人は死んだらどこへ行くのか、死とは何か、誕生とは何かというスピリチュアルの問題を読み取ろうとする。かぐや姫が年老いた夫婦に誕生したという件は、生は人間の意志とは関係ないということを、そして竹の中からの誕生の件は、生は与えられるものだけだということを言わんとしている。そしてかぐや姫の天の帰還は、死は不可避なものであるという考え、そしてあの世への帰還として、天からの迎えとして受け止めるという態度を反映している。死の向こうに何かがあるのかを考えることが、死を乗り越えていく上で重要であると考え窪寺氏は、竹取物語に死の不安を解消を働きを認めるのである。



窪寺俊之教授

人生の後半戦のカウンセリング —魂の知、二律背反と結合の世界—

聖学院大学大学院准教授 藤掛明氏

藤掛明氏が取り上げたのは映画『マディソン郡の橋』、コミック『君はペット』、『のだめカンタービレ』である。藤掛氏は、人生の前半戦から後半生に折り返す中年期の危機は、自分の魂の世界を自覚する良い機会だと指摘する。『マディソン

郡の橋』は、中年期の深い魂の物語である。この物語の中で、ヒロインは夫以外の男性に惹かれながら、もう一人の自分と出会い、自分の全体性を回復していく。

この「もう一人の自分」を描き出している作品として紹介されたのがコミック『君はペット』、『のだめカンタービレ』である。前者においては、すみれに対してモモが、後者においては、千秋真一に対してのだめがもう一人の私の役割を演じている。これらの作品の主人公たちは決して中年ではない。人生の後半生だけでなく、人生の様々なときに、私たちは、二律背反の間に身を置き、尊重や統合のテーマに向き合うことがあるのである。それは、自分の一面的な生き方を調整し、豊かにしてくれる端緒になり得るとというのが藤掛氏の指摘である。

以上が三人の講師の発表内容の概要である。講演の後はいつものように、終了時間を迎えるまで、来場者の方々から寄せられた質問に講演者が答えるという形で会は進められた。

(かねまつ・まこと 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2012年9月28日 聖学院大学ヴェリタス館教授会室)



藤掛明准教授